

日英のウェブ報道におけるサッカー記事に関する比較対照研究

言語文化比較ゼミナール 1214120 貫場 貴之

1. 研究動機・研究目的

競技人口約 2 億 5 千万人というサッカーにおいて、あらゆるチーム、選手が全世界でメディアを通じて評価されている。数々の評価が世界中に出回る中で、各国での評価の観点は異なり、観客、消費者に与える影響は非常に大きい。井上 (1995) は、「日米の野球に関する新聞報道から、客観的であるはずの新聞報道における言語の型が、かなりの程度に文化の型との関わりを持つことを示唆する」と指摘している。その 1 つの例として「アメリカ型がチームスポーツとして個々の選手をそれぞれの役割において評価する傾向が強いものに対して、日本型は投手対打者の一騎打ち的な傾向にある」ことを挙げている。日米の野球報道には言語と文化の型をみることができると知り、日本と英国におけるサッカーの報道内容では、どのような類似点や相違点があるのかについて興味を抱いた。

本研究は、日本と英国のサッカー報道内容に着目し、英語と日本語による試合レポートを比較することにより、それぞれに見られる特徴を明らかにすることを目的とする。

本研究に至った理由は、サッカーで海外留学をした経験からである。実際に、異国の地のサッカーを肌で感じたことで、海外における評価の観点が勝敗に関わる活躍をしているかどうかであることに気付いた。日本のサッカーが得点までの「過程」を大切にする一方、海外のサッカーは得点までの過程よりも、得点という「結果」を重要視する傾向があることを実感した。そして、異国の人々とのコミュニケーションから、言語の重要性やその国の文化を知ることの大切さを学ぶことが出来た。2 ヶ月間の海外留学から帰国後、異国や日本の言語文化についてもっと身につけていきたいという意欲が湧き、言語文化比較ゼミナールを選択した。ゼミナールで勉学に励むなかで、過去のゼミ生のゴルフ、陸上競技、テニスの新聞報道における比較対照研究に出会った。私は、それぞれのスポーツで表れる類似点や相違点を学ぶことが出来、そこからサッカー競技ではどのような類似点や相違点が表れるのか疑問に思い、本論文に至った。

2. 研究方法

現在サッカーは、様々なメディアで取り扱われている。そこで本研究では、インターネットが普及していることからウェブ報道を用いた。また、先行研究により、陸上や野球、ゴルフにおける日米の新聞報道に観察される特徴が明らかにされたので、日本語と英語のウェブ報道における試合レポートを比較することにした。具体的には、日本の明治安田生命 J1 リーグに所属するクラブチームと英国のプレミアリーグ (Premier league) に所属するクラブチームの公式サイトからサッカー競技の試合レポートを収集した。クラブチームは過去 5 年間で常に上位に位置しているクラブを選び、日本は鹿島アントラーズと浦和レッドダイヤモンズ。英国では、マンチェスターシティ (Manchester City Football Club) とチェルシーエフシー (Chelsea Football Club) を選択した。他にも上位に位置しているクラブチームはあったが、試合レポートに特化した 4 チームを選択し、公式ホームページから、日本語

の試合レポート 50 試合と英語の試合レポート 50 試合の合計 100 試合のレポートを収集し、「チームについての記述」、「試合展開、経過に関する記述」、「記録に関する記述」、「1 つのプレーおよびその状況の記述」、「選手のコメント」の大項目に分類した。そして、次に記述内容を大項目から小項目に分類し、そこから観察される類似点、相違点を分析した。また報道内容において、選手やサッカーチームがどのように評価されているのか、どのような点が重要視されているのかについても検討した。

3. 主な結果と考察

分析結果より、「国籍重視の英国型と背番号重視の日本型」、「監督の立場を重視する日本型と軽視する英国型」、「クラブチームと非常に近い距離間にある英国型」、「途中経過を明らかにする日本型」、「選手のコメントから明確さを追求する日本型」という 5 つの、ウェブ報道を構成するモデルを示した。

4. 結論

本研究における結果を、井上(1995)、井上(2002)、鈴木(2004)、内田(2009)と比較すると、類似点と相違点とともに、新しいモデルと考えられるものも発見された。新しいモデルとは、「クラブチームと非常に近い距離間にある英国型」である。論文でも述べたように、「チーム名」の項目において日本の試合レポートよりも、英国の試合レポートの方が、15%割合が高かった。クラブ名から、英国のサッカーにおける歴史の深さを感じることが出来、サッカーが英国人の生活の一部になっていることが推察できた。このモデルは、井上(1995)、井上(2002)、鈴木(2004)、内田(2009)では観察されなかった。

サッカー競技におけるウェブ報道の特徴は他にも観察されたが、本研究で分類したデータは、日英のウェブ報道を合わせても 100 試合と多いとは言い難い。今後より多くのデータを分析することで信頼性の高いモデルを確立することができると考える。現代人が多く目を通すウェブ報道には主観的な要素よりも客観的な要素のほうが多いと考え、観察される特徴を明らかにしてきたが、今後ウェブ報道から全世界が注目する FIFA ワールドカップの試合レポートを収集しどのような類似点や相違点が観察されるかについては、非常に興味深いものであり、さらに研究の余地があると考えられる。

5. 卒業論文の執筆を終えて

卒業論文を書き終えて、指導していただいた金子先生には非常に感謝している。金子先生がいなければ確実に卒業論文を終えることは出来なかった。ゼミ活動を、ともに取り組んできた仲間にも御礼を言いたい。今後卒業論文やゼミ活動で学んだことを社会にでても活かしていきたい、常に新しいことに挑戦し続けていきたい。本当にありがとうございました。